

信毎俳壇・歌壇

第121回 期間賞

信毎俳壇・歌壇の第121回期間賞（2025年1〜6月）が決まりました。入賞者には賞状と記念品を贈ります。

歌壇

丸山・森・堀内さんに

小池 光選

【期間賞】

病む妻を慰む言葉みつからず
手をさすりつつ爪のいる書む

（長野市）丸山 祐司

【評】妻の病氣は軽いものではない。入院しているのだから、日に日に衰弱の度を深めていくように感じられる。

手をさすっているところと爪の色が目についた。血色よく、そこだけ元気だ。思わずうれ



丸山祐司さん

しくなり、そのことを褒めた。「大丈夫だ、この爪の色では」と、語りかけたのだろう。手の爪の色のような小さなものが、今日の日の希望になる。ふかい夫婦愛を感じる。

【次席】

晩年の父はハモニカ吹くだけにシベリアのこととして話さず

（長野市）宮崎 雄

【評】シベリア抑留を体験した父。けつしてそのことを話そうとはせず、ただハモニカを吹くだけだった。極限の体験をした人は、そのことについて沈黙する。戦争体験の継承ということがいろいろ議論されているが、こういう体験者がいることも忘れてはな

らない。ハモニカの音が実にせつなく響く。どういう曲を吹いたのだろうか。重い重い歌である。

小島 なお選

【期間賞】

「幻聴を友と思えばいいよね」と「FMスノー」開局記念日

（長野市）森 ふうか

【評】雪深い地元のローカルラジオ局を想像する。リスナーから寄せられた悩みへMCが返した言葉なのだろう。聞こえる不安になったり、ときに追い詰められてしまうような症状も、友として「しかないなあ」と適切な距離を取りながら付き合っていたらいいの

らしいよね、と。しなやかで優しいアドバイスが作者の胸にしほらく余韻を残したのだ。俵万智のサラタ記念日の歌を思わせる文体も魅力。

【次席】

真冬でも売場に並ぶ夏野菜こんな時代に童話生まれず

（御代田町）柳沢 光雄

【評】温室栽培によって季節によらず多くの野菜を食べられるようになった。いつでもどこでも、なんでも簡単に手に入られる時代。読みたい本、知りたい情報、見たい景色。かつてそれらは手の届かない場所にあつて、人々は届かないものかきさを空想で補いながら満たしてきた。童話のファンタジーは希求から生まれたものだったはず。この時代に私たちはどんな夢を見たらいいのだろうか。

米川千嘉子選

【期間賞】

君からの朝日の中の提案は清く明るく白く眩しい

（松本市）堀内 悠子

【評】「君」とは誰か、どんな「提案」だったのかはわからないが、大切な存在である「君」との関係育てるための大切な「提案」なのは間違いない。それは一日の濁りを含まない澄んだ朝の空気の中、いよいよ正しく理想的に響くが、果たしてその「まぶし」さに二人の現実が堪えら



堀内悠子さん

れるか。用語がもつ簡潔な抒情性に対して、一首全体ににじむものは少し苦い。抽象性がシャープな実感をもたらして魅力的だ。

【次席】

娘入学の記念の梅は義父が植ゑ四十三年間小鳥は来たる

（小諸市）尾沼美枝子

【評】子どもの誕生や入学など、人生の節目に記念樹を植ゑて何十年も見守るのはせいぜい。花も実も楽しめる種類の梅かもしれない。それぞれの時期でさまざまな表情を見せる梅の木にやってくる「小鳥」もさまざまだろうか。鳥の種類はあけず「小鳥」と言ったのが可憐だ。そんな自然の幸いの時間の向こうに、すこやかな娘さんの成長、40年の歳月がふつくと想像される。